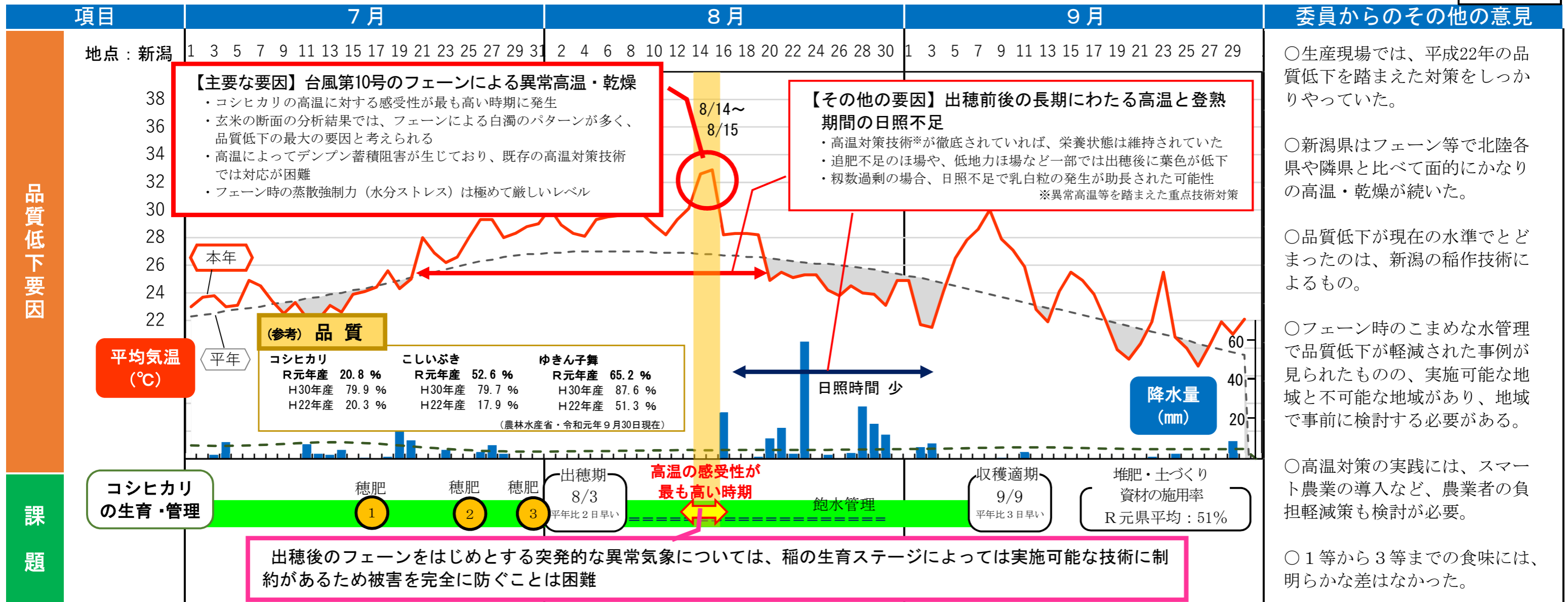


令和元年産米の品質に関する研究会のとりまとめ結果【概要版】

資料2



○生産現場では、平成22年の品質低下を踏まえた対策をしっかりとっていた。

○新潟県はフェーン等で北陸各県や隣県と比べて面的にかなりの高温・乾燥が続いた。

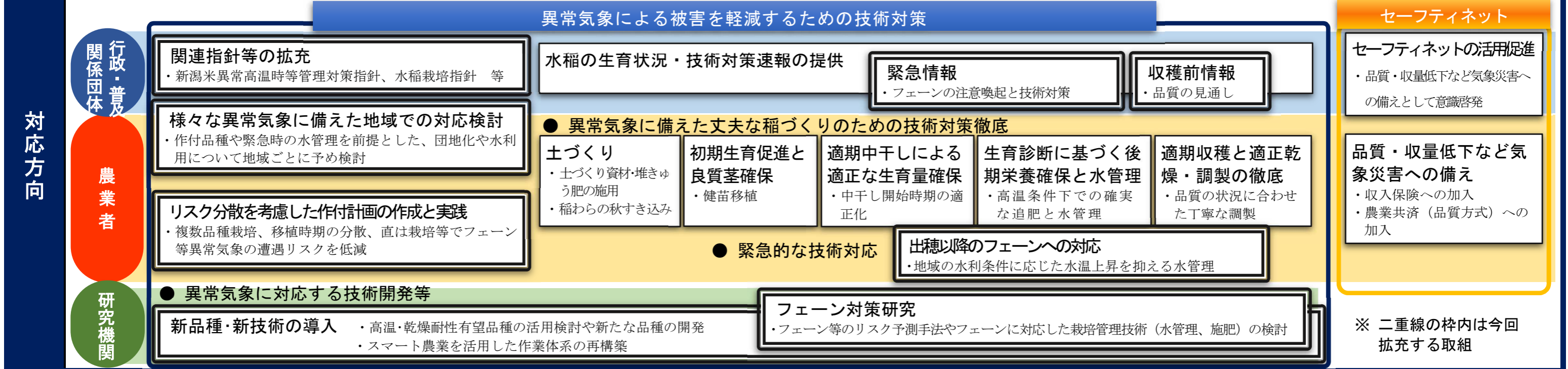
○品質低下が現在の水準でとどまったのは、新潟の稲作技術によるもの。

○フェーン時のこまめな水管理で品質低下が軽減された事例が見られたものの、実施可能な地域と不可能な地域があり、地域で事前に検討する必要がある。

○高温対策の実践には、スマート農業の導入など、農業者の負担軽減策も検討が必要。

○1等から3等までの食味には、明らかな差はなかった。

農業者と関係機関及び県が連携して、品種や移植時期の分散によるリスク管理を進め、異常気象に備えた丈夫な稲づくりを徹底し、突発的な異常気象時には緊急対応を実施して被害の軽減を図る。あわせて、気象被害の発生に備えてセーフティネットを活用する。



品質低下要因

課題

対応方向